

日本英語教育史学会 会報

296

2019 年 12 月 18 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiset.jp会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第275回研究例会報告

2019 (令和元) 年 11 月 16 日 (土), 真宗教化センター しんらん交流館 (京都市下京区) において第 275 回研究例会が開催されました。参加者は 10 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 河村和也氏 (県立広島大学) が「アジア太平洋戦争下の雑誌『語学教育』について」というタイトルでお話しされました。続いて, 米岡ジュリ氏 (熊本学園大学) が「Benjamin Franklin's alphabet reform proposal and its influence on Noah Webster's American English dictionary and textbooks」というタイトルで発表を行いました。司会は馬本勉氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は河村氏, ②は米岡氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①戦時中に発行された『語学教育』誌のいわば外面史に係るご発表を伺いましたが, 発表者ご自身も認められるように, やはり掲載記事をしっかりと読み込んで, 内面史の部分进行分析されないと, 「アジア太平洋戦争下の」というところのフォーカスがぼやけてしまうように思います。時局による圧力のために誌名・研究所名を改めざるを得なかったのか, あるいは, 英語教授研究所自体が英語に限定せずには他言語をも包括するという拡大路線をとろうとした方針転換が決定, もしくは模索されていて, たまたまそれがこの時期に重なったのかなど, できれば改題前 5 年分くらいの *Bulletin* をも併せ読んで, 分析していただくことを期待しております。 (Dragon)

◆①語研の内部者の視点を持ちつつ, 『語学教育』の目次と国内外の動きとを併置したご発表でしたが, あらためて日本の英語教育「史観」について考えさせられる内容でした。英語や英

語を教えることに関する知がどのような思想の持ち主たちによってどのように形成・展開されてきたのか。そもそも語研とは一体, どのような権力性を備えた *institution* なのか。このような疑問が次々と湧いてきます。 (Tak)

◆①アジア太平洋戦争下の英語教育関連の雑誌については本学会でも話題になることがあります。今回のご発表では内外からの圧力や自粛に耐え忍びながら『語学教育』を存続させてきた先人の勇気と知恵を改めて知ることができました。英語だけでなくマルチリンガルに記事が工夫され斯界の権威者が名を連ねていた『語学教育』の姿を丁寧に作成された資料から読み取ることができます。うっかり質問しそこねたので, ここでお尋ねします。会員数も漸次減少した戦争末期, 1944 年~45 年にかけて, 出版部数はどの程度であったのでしょうか。これを手にすることができた人たちは, 防空警報の下, どんな思いで読んでいたのでしょうか。思

いを巡らせています。(Fujiyan)

◆①太平洋戦争期の英語教育の実態を知る上で『語学教育』は第一級の資料です。その詳細な内容目録を作成されて全体を吟味し、諸特徴を的確に提示された努力と力量に感服しました。英語排斥の時局下とはいえ、「英語教授研究所」は英語一辺倒主義を脱し、「語学教育研究所」に再編されました。その歴史的評価を行う必要を痛感しました。同時に、戦後の語学教育研究所が内実において「英語」教育研究所に後退してしまったという発表者の問題意識を共有し、ぜひ 2023 年に迫った語研 100 周年を契機に、歴史的な総括を行っていただきたいと思いました。本発表は、そのための貴重な一里塚になると思います。それにしても、『語学教育』を復刻したいですね。(みかん舟)

◆②ご発表の前半、というより大半は、一般論としては面白い内容でしたが、「研究例会発表規程」にある「発表内容は、日本英語教育史の研究に資するもの」という点からすると、B. フランクリンから N. ウェブスターへの影響が日本の英語教育史にいかに関係するのか全く読み取れませんでした。むしろ、ご発表の最後のところで駆け足でまとめられたわが国英学初期の時代におけるウェブスター・スペリングブックの受容において、例えば、ウェブスターが意図したスペリング指導体系——今回の発表テーマに関連づけるとすると、これと彼の綴字改革とを関連づけることも必要です——、日

本で実際に行われた指導方法とが合致していたのか、あるいは、その間にはギャップが見られるのかなどのところに重点をおいて分析することが求められます。論文投稿に際してはその辺りのことにじゅうぶん留意してください。

(Dragon)

◆②アメリカにおける国家形成とスペリングとの深い関わりについて、Franklin と Webster の間で交わされた手紙は特に興味深いものでした。今回のご発表の射程外ではありますが、Webster の日本への再文脈化について、辞書としての側面だけでなく、森有礼がホイットニーに宛てた手紙や「くわなの会」「羅馬字会」との関連など、広く近代化の枠組みから考えてみるのも面白いのではないかと思います。(Tak)

◆②英語教育史の研究をアメリカにまで拡げたことで、私たちの学会活動に厚み・深みを増すことができました。その点をまず感謝したいと思います。私自身はこの分野の知識に乏しいので、ご発表内容のうち、どこまでが既知の情報で、どれが発表者による新たな知見なのかを切り分けて頂ければありがたかったと思いました。また、論文化される場合には、日本への影響の部分さらに膨らませて頂けると嬉しいです。(みかん舟)

◆当学会には、はじめて来ました。興味を持ちました。(林日出男)

<発表を終えて>

河村 和也 (県立広島大学)

このたびは発表の機会をお与えいただきありがとうございます。研究を始めるに際し貴重な資料をご提供くださいました竹中龍範先生に、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

今回の発表は、語学教育研究所が発行していた雑誌『語学教育』のアジア太平洋戦争下の内容的特徴に迫ろうとするものでしたが、雑誌と時代との関わりを立体的に明らかにしたいとの思いから、まずは独自の年表を編むことに着手しました。始めてみるとこれがあまりにおもしろく、いつまでたっても終わらない作業になってしまい、発表の中心もこれを軸とするものになってしまいました。

現段階において、『語学教育』は戦時下にあっても「雑誌としてのおもしろさ」を追求し続けていたのではないかという印象を持っています。今後、ひとつひとつの記事を丁寧に読み込み、分析的な検討を深めたいと考えています。

今回も、質疑応答の時間にはさまざまな情報や新たな研究の切り口をお示しいただき、感謝しております。その過程で、英語教授研究所・語学教育研究所の有していた「サロン性」について再認識することもできました。このことについては、いつかご報告できるようにしたいと思います。



＜発表を終えて＞

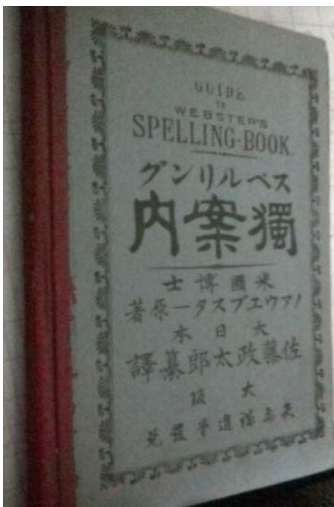
米岡 ジュリ (熊本学園大学)

11月16日、京都でHISELTの発表ができて、大変光栄に思っております。まだ声をかけて下さった川嶋先生にも感謝しています。会員の方が少なくアットホームな雰囲気での発表でしたが、中には遠いところから聞きに来てくれた先生方もいらっしゃって、興味を持ってくれたことが嬉しかったです。しかし当日、風邪を引いてしまい、時には咳をしながら発表を進めたことをお詫びします(その後もなかなか治りませんが...)



今回の発表はベンジャミン・フランクリンのノア・ウェブスターへの影響を纏める良い機会となりました。スペリングと発音の不一致は今だけでなく昔の教育者や学習者も苦労しておりました。そこで若きアメリカの愛国者であるウェブスターは、建国の父であるフランクリンの発音に沿ったアルファベット改革を見習って、「独立した国には独立した英語を」という信念の下、簡素化したスペリングを使い始めました。繰り返し出版された辞書やスペリングブックで少しずつ調整し、現在のアメリカ英語になっていきました。イギリス英語と区別したスペリングだけではなく、長母音と短母音を区別するマークを使うアメリカ式の発音表記もウェブスターが作りました。また、Webster's spelling book のような「シラブル」から始まった英語教育は明治初期の日本でも主流だったようです。

発表後のコメントで、Webster's spelling book を解説する「スペルリング獨案内」を見てみたらという指摘を受け、さっそくメルカリで明治12年のもの(写真参照)を購入しました。その中には、Websterの長母音・短母音・不定な音を区別するマークも、子音・長母音の組み合わせ(ba=ベー, be=ビー他)から始まるシラブル表が紹介されておりました。しかし、短母音になるとそのカタカナ表記(ab=アッブ, eb=エッブ他)は残念ながら日本的発音にしか結びつかないでしょう。「シラブル」に基づいた明治初期の英語教育の成果はどうだったのか、引き続き調査し報告を行いたいと考えております。



)) 事務局より

会員のみなさまには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方には、この会報をお届けする時期に合わせ、郵便もしくは電子メールをお送りいたします。年末を迎えお忙しい時期とは存じますが、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

なお、会費の納入状況等ご不明の点は、お手数ですが事務局（会計担当）までお問い合わせください。

問い合わせ先 事務局（会計担当）河村和也
電子メール：membership@hiset.jp 電話：0824-74-1727（研究室直通）

*事務局よりご連絡を差し上げる際、membership.hiselt@gmail.com のアカウントを使うことがあります。あらかじめご承知おきください。

*事務局を置いている研究室の電話は、通常「留守番電話」となっております。どうぞご用件をお残しください。

)) この先の研究例会・全国大会

◆ 第 276 回研究例会 2020 年 1 月 11 日（土） 東京で開催予定

◆ 第 277 回研究例会 2020 年 3 月 21 日（土） 京都で開催予定

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100～200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (7 月発表希望であれば 4 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

)) 英語教育史フォルダ

◆江利川春雄監修・解題「英語教育史重要文献集成」第Ⅲ期・全 5 巻（ゆまに書房、2019 年 11 月刊、揃本体 90,000 円+税）

第 11 巻「英語教育論 1」は、岡倉由三郎『英語教育〔増補版〕』（1937）を完全復刻。

第 12 巻「英語教育論 2」は、『文部省嘱託英語顧問パーマ氏講演筆記』（1924 頃）、南満洲鉄道編「英語教育ニ関スル専門家ノ意見」（1933）など 5 篇。

第 13 巻「英語通信教育」は、英語学習人口の裾野を広げた通信教育の資料 11 篇。

第 14 巻「戦時下の英語」は、日米両軍の軍用語学書や文部省『高等学校外国語教授研究会講演集』（1942）など 4 篇。

第 15 巻「敗戦・占領下の英語」は、磯尾哲夫『英語教授の理論と実際』（1947）や沖縄のガリ版刷り英語教科書など 7 篇。

- ◆榎本剛士著『学校英語教育のコミュニケーション論：「教室で英語を学ぶ」ことの意味言語人類学試論』大阪大学出版会、2019年9月刊、本体4,900円+税
- ◆前号(会報295)でお知らせした、2019年11月刊行の若林俊輔(著)、若宥保彦(編)『若林俊輔先生著作集②：目的論・学習者論・音声指導・文字指導他』(一般財団法人語学教育研究所)は、同研究所の次のURLから注文できるようになりました。同書は定価1,200円(税込)、送料は1冊につき200円です。

http://www.irlt.or.jp/modules/liaise/index.php?form_id=12

》 新入会員

- ◆ 酒井 秀翔 (さかい ひでと) 千葉県 筑波大学学生
- ◆ 島田 悠太 (しまだ ゆうた) 京都府 東山中学高等学校

日本英語教育史学会 第276回 研究例会

日 時：2020年1月11日(土) 14:00～17:00
 場 所：順天堂大学 お茶の水キャンパス第2教育棟303教室
 (東京都文京区本郷2-4-4)

研究発表①

「日本の自治体における外国語教育政策の波及： 1970年代以降の各都道府県の「研究テーマ」を手がかりとして」

青田 庄真(筑波大学助教) 酒井 秀翔(筑波大学学生)

【概要】 新政策を積極的に開拓する自治体、他の動向を見極めて導入する自治体がある。本研究では、外国語教育をめぐる自治体の政策過程を明らかにすることを旨とし、史料をもとに政策の内容を類型化するとともに、その類型や自治体の特徴に着目して政策波及の動態を分析する。

研究発表②

「講和後におけるロックフェラー財団のフィランソロピー戦略」

広川 由子(愛知江南短期大学講師)

【概要】 本発表は、講和条約締結後におけるロックフェラー財団の対日英語教育支援活動の実態を、日本英語教育研究委員会(ELEC)の成立と展開に着目して明らかにすることを目的とする。ELECの実態解明を通して、米国側の日本の英語教育への「まなざし」に言及し、財団の活動を「フィランソロピー戦略」という新概念で定義することを提唱したい。使用する史料は主にロックフェラー財団文書館所蔵のジョン・D・ロックフェラー3世文書である。

参加費：無料

問合せ：日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】 (順天堂大学ウェブサイトの「交通アクセス」 (<http://www.juntendo.ac.jp/access/>)
にある「本郷・お茶の水キャンパス マップ」より)



【交通案内】 ・JR 線「御茶ノ水」駅 (御茶ノ水口) より徒歩 7 分
 ・東京メトロ (丸ノ内線) 「御茶ノ水」駅 (出入口 1 または 2) より徒歩 7 分
 ・東京メトロ (千代田線) 「新御茶ノ水」駅 (B1 出口) より徒歩 9 分

EDITOR'S BOX この会報の編集作業を行っているのは 12 月 17 日。あと 2 週間ちょっとで平成の最後の、また令和の最初の年が終わろうとしています。／ベテランの先生方には笑われるかもしれませんが、歳をとってきたせい、日々の仕事に追われているせい、あるいはその両方なのか、だんだん時間が経つのが早く感じられるようになってきました。／特に今年は平成から令和へと元号が変わった時代の節目だったはずが、その実感もほとんどないまま節目の年が過ぎ去ろうとしています。／どこで耳にしたかは忘れてしまいましたが、時間が早く過ぎているように感じるのは、日々の出来事に感動を見つけられていない証拠なのだそうです。その意味では、ある番組で 5 歳の女の子が素朴な疑問に答えられない大人を叱る時に用いる「ポーっと生きてんじゃねーよ！」という近頃流行のフレーズは、自分にもあてはまっているのかもしれませんが。／来年はいろいろなことに感動できるような心の余裕を持とうと感じる今日この頃です。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)